Macrobius の Commentarii in Ciceronis somnium Scipionis I.VI. ノート

—Philon とMacrobius をめぐって—

野　町　　啓

マクロビウスのCommentarii in Ciceronis somnium Scipionis 第Ⅰ巻第Ⅵ章は，数7に関する叙述で占められている。周知のように，キケロの De re publica 第Ⅵ巻の末尾にあたる（VI. 9～29），いわゆる Somnium Scipionis においては，7は，8と共に，完全数として（VI. 12＝c. 2, 2），また宇宙論的意味から（VI. 18＝c. 5, 2），小スキピオの vitale spatium を決定する数として，象徴的に用いられている（cf.…, quod duo numeri in se multiplicati vitale spatium viri fortis includerent…＝ Macrob. in som. Scip. VI. 1 —以下特別にことわらない限り，ノンブルはマクロビウスの当該書第Ⅰ巻の章・節を示す—）。[1] この部分は，直接には，Somnium Scipionis の中にみられる，上にあげたキケロ自身の7についての言及に対する註解と考えられる。全体の構成は，まず7の重要性の例証として，プラトンの Timaeus があげられ，その中で，anima mundi が，7つの数の混合により，かつ7段階において生成されたことが，述べられている。[2] さらにこれとあわせて，7が，なぜ完全数と呼ばれるに値いするか，その根拠を，α）7の構成要素，すなわち，その和が7となるそれぞれの数（1＋6，2＋5，3＋4）の持つ meritum，および，β）7自体の持つ meritum，の二つの面から明らかにしようとする（VI. 5～6）。そして，以下α），β）の主旨にそって，7の特質，神聖性が展開されている。[3] 全体として，プラトンの Timaeus にみられる宇宙身体・宇宙霊魂の生成と構成の問題を，7との関連において，Neoplatonism-Neopythagoreanism 的発想で敷衍している点が注目される。すなわち，マクロビウスは，註解に際し，一貫して叡智界（esse＝intellegibilia）—現象界（videri esse＝corporalia）の二元論的世界観に立脚しているが（cf. VI. 8. 19），その場合，数との対応関係において，特に前者を細分化することにより，両世界を階層秩序の関係で把握し

ているように思われる。このような観点にたった場合，注目されるのは，VI. 8～9，および20である。

彼は，7の神聖性を，その（1＋6）という構成に関連して，まず1の μονάς との同質性から，論証しようとする。すなわち，1は，それ自体は数でなく，むしろあらゆる数の fons, origo（VI. 7），ひいては万物の initium, finis としての μονάς である（VI. 8）。そしてこの μονάς に時間の変化を超越し（vices temporum nesciens—VI. 8—），質料的要素となんら関連を持たず（aliena a silvestris contagione materiae—VI. 9—），しかもあらゆる存在の原型を自己の中に内包し，創造する（innumeras tamen generum species et de se creat et intra se continet. —VI. 8—），叡智界・神的世界を，象徴させている。しかし μονάς は，あく迄も神的世界であって，神そのものではない。μονάς 自体も，その根源は，summus deus に還元されるのであり，prima causa としてのそこから生じたものにすぎない（haec monas orta a prima rerum causa—VI.10—）。彼の場合，ἰδέα は数と等置されており（cf.VI. 3），μονάς は ἰδέα 界・叡智界全体の数的構成・性格を，象徴しているのである。そして叡智界は，mens, anima mundi（VI. 8）へと，さらに細分化されている。summus deus とこの叡智界の関係は，いわば summus deus を頂点とし，そこからする mens→anima mundi の流出関係として，把握されている。叡智界のこのような構成，および mens, anima mundi それぞれの宇宙秩序における機能は，7の（5＋2）という要素に関連して（VI. 18～20），5の意義を述べている VI. 20 に，より明瞭に述べられている。すなわち，彼は，叡智界・現象界の合一体としての全宇宙が，特に前者の細分化により，5つの階層から構成されていると考え，そこに5の意義を求めているのである（aut enim *deus summus* est aut *mens ex eo enata* in qua rerum species continentur, aut *mundi anima* quae animarum omnium fons est aut *caelestia* sunt usque ad nos, aut *terrena natura* est, et sic quinarius rerum omnium numerus impletur.—VI.20—）[4]。

このような，数との関連における宇宙秩序の階層的把握，特に，μονάς を神的世界・ἰδέα 界・mens・νοῦς と等置し，また7の神聖性を μονάς との関連から論証しようとする傾向（cf.VI. 10～11）の思想的典拠については，さまざまの見解

がみられる。ἀριθμός なかんずく μονάς を存在の原理とするSchema は，Philon, Moderatos, Aetios, Nichomachos v. Gerasa, Theon v. Smyrna, Anatolius, Sextus Empiricus 等の帝政時代の諸文献・学説誌に随所にみられる。そして Schmekel 以来，このような発想にみられる数論的要素の起源・典拠を，すべて，その存在が推測の域を出ないポセイドニオスの Timaeus-Kommentar に遡及・還元してしまう見方が，支配的であり，マクロビウスの場合にも，同様の指摘がなされて来た。またさらに，このような諸文献・学説誌にみられる数論的要素から，逆にポセイドニオスの Timaeus-Kommentar を再構成しようとする試みが，しばしばなされて来たのである。(5) しかし最近，Neoplatonism, Neopythagoreanism の起源の問題と関連して，数論的発想からする存在の階層的把握の典拠を，ポセイドニオス只一人に還元してしまうのは妥当でない。このような思想体系は，彼以前，ことに，プラトンの後期思想をめぐって，古アカデミー内部で形成されたのであり，むしろそこに典拠を求めるべきだ，とする主張がみられる。Neopythagoreanism の名の下に一括される諸文献にみられる数と存在論のこのような結合は，いわば Fseudomorphose der Älteren Akademie にすぎない，というのである。(6) このような見解の背後には，古 Pythagoreanism の本来の性格とその伝承の問題，およびそれと Neopythagoreanism の断絶の問題がある，と考えられる。通常，存在を数から演繹し，数にその αἴτια を求めるのは，古 Pythagoreanism に固有な教説であった，と考えられている。しかし，数と存在の原因の関連について，アリストテレスの伝える古 Pythagoreanism の教説と，セクストゥス・エンピリクスの Adversus Mathematicos (X. 248〜309) にみられる古 Pythagoreanism に関する報告との間には，根本的な矛盾がみられる。すなわちアリストテレスは，αἴτια に関する古 Pythagoreanism とプラトンの教説と比較して，ἀριθμοί に αἴτια を求める点に両者の共通性をみている (Met., 987b24)。しかしプラトンは，ἀριθμοί を独自の領域として，τὰ αἰσθητά から離在させた，とアリストテレスは主張する (Met., 987b28)。他方，古 Pythagoreanism は，事物と数を等置・同一視し (ἀριθμοὺς εἶναί φασιν αὐτὰ τὰ πράγματα—Met., 987b29—)，τὰ αἰσθητά の領域外になにものも存在しないと考えた (cf. Met., 989b24ff.) と述べ，そこに両者の相異を，彼は求めているのである。このようなアリストテレスの報告に

したがえば，古 Pythagoreanism の考える αἴτια，すなわち存在の原理としての ἀριθμοί は，当然 τὰ αἰσθητά の領域内にとどまることになる。これに対しセクストゥス・エンピリクスによると，古 Pythagoreanism は，αἴτια を ἀσώματα なものと考え，そして μονάς と ἀόριστος δυάς にそれを求めた，というのである (cf. adv. Math., X. 250ff. esp. 261.276)。このように考えると，数と αἴτια に関して，アリストテレスの報告とは本質的に矛盾し，異なるいま一つの古 Pythagoreanism の教説が伝承され，流布していたことになる。われわれの当面の課題であるマクロビウスについても，μονάς を超越的な神的世界・叡智界と等置し，その中での，また，そこからする階層的流出による Kosmogonia は，むしろセクストゥス・エンピリクスの伝える古 Pythagoreanism の教説と親近性を持つ。(7) そして，このような発想は，先にもふれたように，いわゆる Neopythagoreanism の諸文献に随所にみられ，かつ，古 Pythagoreanism の教説として紹介され，そこに起源が帰属させられているものなのである。しかし，これと同様の体系はスペウシッポス，クセノクラテスのものと考えられる断片にもみられるのであり，先のアリストテレスの報告とあわせて考慮に入れた場合，その起源は，むしろ古アカデミー内部に求めた方がより至当と思われる。以上のような見解にたつのが，たとえば最近の Burkert, Krämer である。彼らは，さらにセクストゥス・エンピリクスの Adversus Mathematicos (X. 248～309) を，プラトンのいわゆる ἄγραφα δόγματα，ことに περὶ τἀγαθοῦ と関連させようとするのである。(8)

マクロビウスにみられる μονάς との関係からする 7 の重視，およびその summus deus と区別された神的世界・叡智界との等置ときわめて類似した発想が，フィロンにみられ，先の思想的典拠の問題と関連して注目を要する。(9) フィロンは創世記 (2：2) の譬喩的解釈を Legum Allegoriae (I. 2～16) の中で展開している。その中で彼は，死すべきもの (τὰ θνητά) も，不滅なるもの (τὰ ἄφθαρτα)・神的なるもの (τὰ θεῖα) も，それぞれ，それに固有な数に従って創造されたとし，前者には 6，後者には 7 を充当させている。その際 7 は，μονάς との同質性から，神的世界に対応されているのである。フィロンとマクロビウスを比較した場合，前者では 6，後者では 8 との関係において，7 が問題となっており，また前者の場合，その μονάς との同質性から，後者の場合，μονάς という要素を内

包している点に7の重要性・神聖性が求められているという相異がある。しかし，すでに他で指摘したように（本稿註9参照），フィロンの場合も，数すなわち μονάς（＝7）を基礎とする神的世界（叡智界・イデア界）と，δυάς を原理とする現象界の二元論にたち，しかも，前者を，ὁ θεός を頂点として細分化し，階層的な宇宙論を展開している。この点に着目し，Krämer は古アカデミー内部で形成された数論と存在論の，フィロン—マクロビウス—カルキデイウスに対する影響と系譜を想定しているのである。(10)

Krämer は，フィロンが全存在を3つ，より厳密には4つの階層秩序において把握している，と考える。すなをち ὁ θεός→κόσμος νοητός（μονάς ＝神的 νοῦς，ἑβδομάς により象徴され，λόγος により総括される神的世界・イデア界）→κόσμος αἰσθητός（δυάς により象徴され，ὕλη により規定される）の三段階であり，(11) さらに κόσμος νοητός は，transzendenter λόγος（＝λόγος ἐνδιάθετος，数に象徴されるイデア界＝マクロビウスの場合の mens に相当）と immanenter λόγος（＝λόγος προφορικός，マクロビウスの場合の anima mundi に相当）に二分され，四段階をなすとみる。(12) そして，この階層秩序は，先にみたマクロビウスにみられる summus deus→mens→anima mundi→videri esse，さらにはカルキディウスの Timaeus 註解(c. 176～7）にみられる summus deus→mens dei（＝voluntas dei＝νοῦς）→anima mundi（＝secunda mens —c. 177—）とも軌を一にするものとみなしている。これと類似の存在体系は前1世紀後半の Eudoros にすでにみられ，また紀元後1世紀後半のアカデミーの継承者 Moderatos v. Gades にもみられるのであって，フィロンの後代に対する直接の影響というよりは，その起源自体は彼以前に遡及しうるのであり，共通の典拠，すなわち古アカデミーの伝統にもとづくものと考えるのである。(13)

神を頂点とし，叡智界，現象界の三者を階層的に把握しようとする発想は，当初においては，いわば峻別された叡智界と現象界をいかに関連づけるか，というプラトン的二元論から生ずる問題に対する，一つの解答として提起されたと考えられる。またフィロンが旧約聖書，特に創世記を譬喩的に解釈するに際し，この体系を根底にし，適用したことからも推察されるように，クリスト教的な世界観とも容易に融合しうると考えられ，その面での影響もみのがすことは出来ない。

さらに，この発想がマクロビウス，カルキディウスに痕跡をとどめている事実は，どのような内実のプラトニズムが，どんな過程を経て伝承されていったかを検証するための，有力な手がかりを提供するものといえる。また Neoplatonism, Neopythagoreanism の起源の解明にも大きな役割をはたすものと考えられる。ことにマクロビウスの Commentarii が，カルキディウスの Timaeus 註解とならんで，中世西方世界において最も権威あるプラトニズムの典拠とみなされていたことを考慮に入れた場合[14]，そこでは純粋な形でのプラトン自身の教説よりは，古アカデミーのそれに対する解釈という濾過を通した，いわゆる Neoplatonism, Neopythagoreanism 的性格を濃厚に持つプラトニズムが継承され，支配的な影響力を持っていたことが推察されるのである。

註

(1) 本稿ではマクロビウスのテキストは Bibliotheca Teubneriana 中の Macrobius vol. II. (ed. J. Willis, 1963) を用い，随時 Stahl, W. H., の英訳と註 (Macrobius' Commentary on the Dream of Scipio, 1952) を参照する。なおキケロの De re publica の章・節の区分は，たとえば12 (=c. 2,2) の場合，前者は L. C. L. (No.213) 中の Keys, C. W., のテキスト (pp.261〜83) をさし，後者は上掲 Teubneria 中の Macrobius Vol. II. 巻末に所収の Somnium Scipionis によるものである。

(2) VI. 2.4, および 46〜47。cf. Tim., 35b-c。この場合，彼が，Crantor により最初に用いられたという Lambda (cf. Plut., de anim. procreat. in Tim., 1017d. 1027d) を念頭においていることはいう迄もない (cf. Stahl, op. cit., p.109 n.48)。

(3) VI. 7〜17=1と6; VI. 18〜20=2と5; VI. 21〜44=3と4—ここでは Tim., 31b—32bの宇宙身体の生成と構成，およびそれと関連して，四元素の結合の問題が展開されている—VI.45以下=7自体の持つさまざまの merita, すなわち，45=語源からする7の神聖性 ἑπτάς<σεπτάς<σέβομαι cf. Philon, op. mund., 127 ;46〜47=本稿註(2)参照；48〜61=月・太陽の運行と関連して，7の kosmologisch な観点からする意義，すなわち，宇宙の合法測性

が7により象徴される；62〜81＝人間の一生，人体の構造等，人事の面で7が持つ意義が展開されている。なお7が伝統的に重視される根拠については，本稿註(9)に記載した拙稿参照。

(4) cf. Stahl, op. cit., p.103, n.25。

(5) ポセイドニオスの Timaeus-Kommentar は，Sex. Emp., adv. log., I. 92; Plut., de anim. procr. in Tim., 1023 の記述が典拠となり，その存在が推定され，Schmekel, A., のDie Philosophie d. mittleren Stoa（SS. 403〜432）以来，その後代に対する影響を過大評価する傾向がみられる。その再構成は，たとえば数7については Roscher, W. H., Die Hebdomadenlehre d. griech. Philos. u. Ärtzte（SS.109ff.），Gronou, K., Poseidonios. u. jüdisch-christliche Genesisexegese(S.197, 295）等が試みている。Macrobius の場合，特に第I巻V〜VI章にみられる数論について，Fries, Prächter, Courcelle 等，ポセイドニオスにその典拠を求める見解が支配的であった（学説史的展望については，cf. Stahl, op. cit., p. 38)。またポセイドニオスの過大評価に対しては，Robbins, F. E.,（Poseidonios and the source of Pythagorean arithmology, apud Class. Phil., XV. 1920, pp. 309ff.; The tradition of Greek arithmology, apud Class. Phil., XVI. 1921, pp. 97. ff.)等の反論がある。この点に関する学説史的展望については cf. Krämer, H.J., Der Ursprung d. Geistmetaphysik, S.47. Anm. 82, S. 55. Anm. 120, S. 264, S. 331. Anm. 521, および次註。

(6) たとえば cf. Krämer（上註），Burkert,W., Weisheit u. Wissenschaft, SS. 49〜50, 53f., 57〜58, 194, 198。

(7) さらに VI. 5〜13. 22 にみられる点・線・面・立体間の移行の数的説明，VI. 18における，δυάς を感覚界・現象界を象徴する最初の数としてとらえる発想と，Sex. Emp., adv. Math., X. 278ff. との類似も，あわせて注目する必要がある。なおアリストテレスはこのような発想を，プラトンに帰属させている（cf. Met., 992b 13；1080b 23；1085a7ff. etc)。

(8) cf. Burkert, op. cit., SS.16, 53〜63, 72；Krämer, op. cit., S. 48, 54。

(9) フィロンにおける7の意義，およびそれと存在の階層的把握との関連については，拙稿「Aristobulos と Philon—ἑβδομάς をめぐって—」(「西洋古典

学研究」XV. 発表予定）で，かなり詳細にわたって考察したので，ここではふれない。また7に関する具体的な事例で，フィロンとマクロビウス両者の一致している箇所としては，たとえば VI. 11—op. mund. 100；VI. 45—op. mund. 127；VI.64—op. mund. 124；VI. 70. 72. 75〜6—op. mund. 103；VI. 80—op. mund. 118；VI. 81—op. mund. 119. 122. 125 等があげられる。この事実は，両者が共通の典拠乃至は伝承に依拠している可能性を，さらに示唆するものといえる。

(10) cf. Krämer, op. cit., SS. 276〜9。

(11) κόσμος νοητός を λόγος として把握し，神と現象界の中間に存在する一種の μεσίτης の機能をはたすものとしてみることについては，cf. quod deus imm., 30〜32。λόγος は，フィロンの場合，ὁ θεός と区別して θεός (de somn., I. 229) とも，εἰκὼν θεοῦ (spec. legg., I. 81；conf. ling., 97) などとも表現されている。存在のこのような階層的把握は，ὁ θεός が，κόσμος νοητός の段階では μονάς (=ἑβδομάς)，θεός，λόγος として認識され，自己をあらわすというように理解することも可能である（cf. Vogel, C. J., On the neoplatonic character of Platonism and the Platonic character of Neoplatonism, Mind, 62, 1953, pp. 46〜47)。また，彼の場合，λόγος が数論により基礎づけられていることについては，cf. Krämer, op. cit., S. 273。

(12) λόγος のこのような二面性については，cf. vit. Mos., II.127 および Krämer, op. cit., S. 277. Anm. 320〜321。

(13) Krämer は (op. cit., S. 278)，フィロンの場合，λόγος がストア的要素をかなり強く持っており（特に，λόγος προφορικός)，これに対しマクロビウスの場合，そのような要素を含んでおらず，それだけ純粋にフィロン以前に形成されたこのような発想の原型を保持していると考える。たとえば Eudoros (apud Simpl. in Phys., 181, 10ff. D. cf. Krämer, op.cit., S. 277) について Theiler は（Gott u. Seele im kaiserzeitlichen Denken, in Entretiens sur l'antiquité classique, Tome, III. p. 86)，次のように図式化している。

das Eine (=ὑπεράνω θεός=)—|—μονάς (=εἶδος)——|—Sinnliches.
ἀόριστος δυάς (=ὕλη)—

また Moderatos v. Gades の場合（apud. Simpl. in Phys., 230, 35ff. D.）については Krämerは（cf. op. cit., S.252, 277），次のような Schema であらわしている。すなわち ἕν→ἕν（=εἶδη）→ψυχικόν→ὕλη/αἰσθητά。

(14) cf. Stahl, op. cit., p.10。